

令和6年度自己評価表（中間評価）

鳥取県立青谷高等学校

長期目標	～ふるさとキャリア教育 生涯学び続けるために～	今年度の	1 知を磨く	○進路実現100% 生涯にわたって学び続ける力を育成する。
(学校ビジョン)	自分らしさに誇りをもち、社会で信頼され、社会に貢献する人材の育成	重点目標	2 徳を高める	○ルールを守り、郷土愛や社会の一員としての自覚と使命を育む。
			3 健康を育む well-being	○一人ひとりが輝き、皆から愛され必要とされる存在を目指す。
			4 業務改善の推進	○時間外業務時間縮減を推進する。

評価基準 A：十分達成（95%） B：概ね達成（75%程度） C：変化の兆し（60%程度） D：まだ不十分（40%程度） E：目標・方策の見直し（30%以下）

年 度 当 初					評 価 結 果 （ 9 ） 月		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
1 知を磨く	○進路実現100% 生涯にわたって学び続ける力を育成する。	○進路実現98% ○連携を取り、計画的に補習、面談を実施している。 ○基礎学力の定着を組織的にやっている。 ○STEAM Lab.を新設、始動している。 ○青谷学Ⅰ・Ⅱの学習を通して協働、情報収集、情報発信力を身につけている。 ○地域コーディネーターの配置により、地域と組織的につながっている。 ○各種資格、検定の受験者は昨年度並み。 ・「授業で基礎的・基本的な学力が身についている」と思う生徒が39.3%【指標①・学⑮】 ・「授業の予習や復習をしている」と肯定的に思う生徒が57.8%【指標②・学⑫】 ・「講演会等が進路や生き方を考えるのに役立っている」と肯定的に思う生徒が87.4%【指標③・学⑯】	○進路実現 100% 希望進路の実現に向けて、努力している。 ○校内GIGA研究等により、教職員のICT活用スキルが向上し、活用が促進されている。 ○青谷学Ⅰ・Ⅱを通じて、生徒がさらに主体的、積極的に地域について学び、地域貢献や交流を図っている。 ・「授業で基礎的・基本的な学力が身についている」と思う生徒が45%以上。【指標①・学⑮】 ・「授業の予習や復習をしている」と肯定的に思う生徒が65%以上。【指標②・学⑫】 ・「講演会等が進路や生き方を考えるのに役立っている」と肯定的に思う生徒が90%以上。【指標③・学⑯】	○「産業社会と人間」「総合的な探究の時間」「3年進路HR」の有効活用。 ○就職希望者の適性と希望のすりあわせのための早期面談実施。 ○放課後、長期休業中の補習の充実。 ○基礎力診断テストの活用研修会の実施。 ○ICT活用の促進。 ○充実した青谷学Ⅰ・Ⅱの継続・発展。	○「産業社会と人間」、「総合的な探究の時間」「3年進路HR」においては、外部人材を活用しながらキャリア意識を高めることができている。 ○就職については93%の内定をいただいた。 ○年次と教科とで連携を取り、狙いを明確にした補習を実施している。 ○面接練習は授業のみならず放課後も対応したが、生徒の習熟には個人差が見受けられた。 ○ベネッセコーポレーションから講師を招いて研修を実施。進学希望者への意欲の向上に繋げている。 ○昨年度完成したSTEAM Lab.の有効活用を行っている。 青谷学での画像処理、カタリバを介した遠隔の学校との交流、放課後における部活動での利用があった。また、DXハイスクールに認定され、職員の研修の機会を増やし強化を図っている。 ○青谷学Ⅰ・Ⅱでは、地域連携を深め充実した活動を行っている。	B	○就職未内定者については引き続き、面談等を積極的行い内定に向けて努力する。進学希望者には、見通しを持たせながら計画的に学習や準備をさせる。 ○補習に加えて早期段階での生徒のモチベーションを上げる取組（面談の充実等）を行う。 ○DX視察を受け、効果的なICT機器の活用方法等学びを充実させる。 ○青谷学Ⅰ・Ⅱでの発表の機会において問題解決能力やコミュニケーション力、プレゼンテーション力を鍛える。
2 徳を高める	○ルールを守り、郷土愛や社会の一員としての自覚と使命を育む。	○授業規律や授業態度については、一部生徒に改善の余地あり。 ○講演会等を通じて進路や地域のことを知り、刺激を受けている様子がうかがえる。 ○各種ボランティアへの参加は一部生徒にとどまっている。 ・「学校生活で周囲の人たちとの人間関係は良好」と思う生徒が49.6%【指標④・学⑬】 ・「地域や学校外でのボランティア活動に参加した」生徒が51.9%【指標⑤・学⑳】	○全職員の共通理解のもと、生徒の授業規律・授業態度が高まっている。 ○他者への配慮ある言動・行動ができ、良好な人間関係を築くことができている。 ○多くの生徒にボランティアを紹介し、ボランティアと進路の連動性を意識させる。 ・「学校生活で周囲の人たちとの人間関係は良好」と思う生徒が60%以上。【指標④・学⑬】 ・「地域や学校外でのボランティア活動に参加した」生徒が60%以上。【指標⑤・学⑳】	○少人数指導やチームティーチング、特別支援教育支援員の支援により、クラス全体及び一人ひとりへのきめ細やかな対応を継続する。 ○産業社会と人間や青谷学を通じて、地域連携を図り、地域行事にも積極的に参加する生徒を育成する。 ○生徒会執行部・部活動（同好会）・進路等を通してボランティア活動を紹介し、生徒の意欲を高める。	○他者への配慮が不十分なため、人間関係にトラブルがあったケースが見受けられた。 ○1年次生については、スムーズに学校生活が始められるよう、年度当初にSCによる全員面談を行った。 ○2年次生においてはインターンシップに参加し、社会人としての心構えやマナーを学んだ。一部反省すべき点はあったが、職業観や地域貢献の気持ちを育むことができた。 ○ボランティアに関する情報を随時提供しながら、執行部や部活動単位で参加をしている。夕涼み会の企画に関わるなど活動の内容も充実してきている。	C	○学校行事、年次集会などを通じて仲間意識・集団意識の高揚に努める。 ○職員での共通理解を深め、素早くきめ細かい対応を継続して行っていく。 ○地域コーディネーターとの連携や、同好会などを活用してボランティア活動への意欲を喚起する。 ○地域の行事にも積極的に参加するよう促す。
3 健康を育む well-being	○一人ひとりが輝き、皆から愛され必要とされる存在を目指す。	○挨拶を返すことはできるが、自らが自主的に挨拶することのできる生徒は少ない。 ○個別の保健指導に加え、保護者への面談を実施し、意識を高めている。 ○執行部が中心となり、学校祭の企画運営を行い、また募金活動、校則の見直し等の協議を行っている。 ○部員不足等で活動は低迷しているが、大会出場、作品展出品など満足度を高める活動を継続している。 ○公式Instagram、ホームページ更新を積極的に行っている。 ・部活動は充実していると肯定的に思う生徒が86.2%【指標⑦・学㉑】（加入率56.8%）	○基本的生活習慣が確立している。 ○挨拶が行き交う学校になっている。 ○自分の人権、他者の人権を尊重し共に生きる態度を持っている。 ・「毎日の挨拶はきちんとしている」と思う生徒が55%以上。【指標⑥・学⑤】 ・部活動は充実していると肯定的に思う生徒が90%以上。【指標・学㉑】	○欠席、遅刻、早退は届け出を徹底させるとともに、家庭との連絡を密にする。 ○社会の一員としてふさわしい礼儀・挨拶・言葉遣いの指導を行う。 ○人権教育HRや講演会及び「だっぴ」など様々な取り組みの中で人権意識を高めたり、自己肯定感を養う。 ○日々の生活において周囲の者に対する配慮ができるよう、折々に個々の生徒に声かけをするとともに教員間で情報を共有し連携して指導していく。 ○医療・福祉に関する外部機関と密に連携し生徒の支援にあたる。	○朝のあいさつ運動などで挨拶のできる生徒が少ない。3年次生では、面接指導、就職活動を通じて礼儀作法、挨拶、言葉遣いの指導を実施している。 ○「だっぴ」は今年度も好評であった。人権講演会での講師の熱い語りに、生徒の気持ちは揺さぶられていた。 ○目視のみではなく、気持ちメーターなどICTを活用し、生徒の心身の健康管理に努めている。 ○医療との連携によって、本校の生徒を医療機関につなげることができた。また、専門的観点からの講演を通して生徒、教職員ともに視野を広げることが出来た。	B	○挨拶・言葉遣いの指導は、職員が率先して実施し、生徒に対しては必要性を伝えていく。 ○保護者による欠席等届け出を徹底する。 ○自己と他者の関係を支えるコミュニケーション力が日々の教育活動の中で培われるよう日常的にも声をかけていく。 ○生徒会執行部が主体となり、挨拶運動や募金活動などで挨拶を続ける。 ○気持ちメーターの入力を徹底しながら、生徒の心身の状態の変化を察知し、声かけに繋げる。
4 業務改善の推進	○時間外業務時間縮減を推進する。	○業務日誌のデジタル化の推進により、情報共有、業務縮減につなげている。 ・全教職員が、時間外業務時間は月平均45時間以内、年360時間を超えた職員は2名。【指標⑧】 ・教職員の年休取得が平均年15.53日。【指標⑨】	○教職員が健康であり、教育活動が充実している。 ・全教職員が、時間外業務時間は月平均45時間以内、年360時間以内。【指標⑧】 ・教職員の年休取得が平均年15日。【指標⑨】	○管理職による声かけ。 ○毎月の部活動計画・実績の点検。 ○教育DXをさらに進める。	○長期休暇、定期考査等で年休取得を呼びかけた。 ○勤務の振替等を行い、職員の負担軽減に努めた。 ○時間外業務時間が月45時間を超える者は1名。 ○ポータルサイトの改善、職員室のモニター設置等積極的に校務DX化に邁進している。	A	○管理職は引き続き職場の環境整備には目を配るよう努める。 ○多くの行事があるが、計画的に進むよう進捗状況を管理する。 ○DX視察において学んだことを生かし、一層校務DX化に取り組む。

